

全体研究

【研究主題】

「学校楽しいーと」を活用した不登校の未然防止に関する研究
ー学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組を通してー

教 育 相 談 課

目 次

はじめに	1
第1章 不登校の現状と未然防止の取組の重要性	
1 不登校の現状	1
2 未然防止の取組の重要性	1
第2章 研究のねらいと内容	
1 研究のねらい	2
2 研究の内容	2
第3章 不登校の未然防止に向けた重点的・組織的・継続的な取組の在り方	
1 重点的・組織的・継続的な取組の相互作用	3
2 「学校楽しいーと」の活用	3
3 重点的な取組の在り方	4
4 組織的な取組の在り方	5
5 継続的な取組の在り方	6
第4章 不登校の未然防止に関する調査及び結果分析・考察	
1 調査の実施	7
2 調査結果	7
3 考察	11
第5章 学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組	
1 小学校における重点的・組織的・継続的な取組の実践	12
2 中学校における重点的・組織的・継続的な取組の実践	14
3 高等学校における重点的・組織的・継続的な取組の実践	16
第6章 研究の成果と課題	
1 研究の成果	18
2 今後の課題	18
おわりに	18
引用・参考文献	18
参考資料	19

はじめに

全国の小・中・高等学校においては、児童生徒数が減少していく中、不登校児童生徒数は令和元年度に23万人を超えるなど増加を続け、学校教育における大きな課題となっている。

本研究では、不登校対策の基盤として、新たな不登校児童生徒を生まないこと、つまり未然防止を中心に据えて、「不登校の未然防止の取組は、全ての児童生徒の学校生活の充実という生徒指導の本質に立ち返るものである。」という認識に立ち、調査研究を進めてきた。

教師一人一人が不登校の未然防止について理解し、学校や児童生徒の実態を踏まえて重点的に取り組む観点を設定する。その上で、全ての児童生徒が生き生きと学校生活を送ることができるように、チームで共通理解と共通実践を進めながら継続的な取組を行っていくことが必要である。

本研究の成果が学校組織力を一層高め、県内各学校の不登校の未然防止に役立ち、不登校児童生徒数の減少への有効な指針となることを期待したい。

第1章 不登校の現状と未然防止の取組の重要性

1 不登校の現状

学校は、児童生徒の社会的自立に向けて、児童生徒が自らの進路を主体的に形成していくための生き方を支援する場となるよう、個に応じた支援の充実を図っていく必要がある。そして、生徒指導は、一人一人の児童生徒の人格のよりよい発達を目指すとともに、学校生活が全ての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指している。

しかしながら、「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について（文部科学省、令和2年）」（以下「令和元年度問題行動等調査」という。）によると、不登校児童生徒数は全国的に年々増加している（図1）。本県においても増加傾向にあり、児童生徒一人一人の支援の充実を図るという観点から、学校にとって喫緊の課題となっている。



図1 全国の不登校児童生徒数の推移

2 未然防止の取組の重要性

不登校の主な要因(学校に係る状況)としては、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」、「学業の不振」、「入学、転編入学、進級時の不適応」等が挙げられる（「令和元年度問題行動等調査」）。また、要因の解決に至らず、不登校が長期化するケースに加え、毎年、新たに不登校となる児童生徒も多い。

そこで、不登校児童生徒数を、前年度から引き続き不登校状態にある児童生徒数（以下「継続数」という。）と当該年度に新たに不登校となった児童生徒数（以下「新規数」という。）に分けると、継続数に比べ、新規数の方が年々増加人数が多く、平成30年度及び令和元年度は新規数が継続数を上回った（図2）。学校で不登校に関する対応を適切

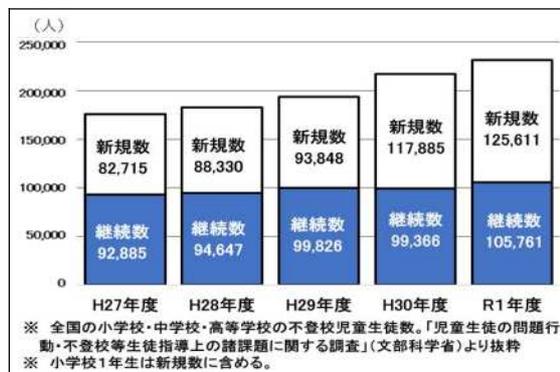


図2 全国の不登校児童生徒数の内訳

に行い、改善につながった事例もあるが、新規数の増加から不登校児童生徒数の総数が増加している状況となっており、本県も同様の傾向にある。このような状況から、継続状態にある不登校児童生徒への個に応じた支援をする一方で、新規数を抑制するために、全ての児童生徒を対象とした開発的・予防的な視点から、不登校の未然防止の取組を積極的に進めていく必要がある。

第2章 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

本課の平成25・26年度の調査研究「不登校の未然防止と支援の在り方に関する研究」では、不登校の未然防止や初期対応、自立支援における児童生徒への対応には、「児童生徒理解」と「人間関係づくり」が重要であることを明らかにした。

また、国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究事業」等においても、不登校の未然防止の取組については先行研究されており、効果のある取組として3点挙げられている（図3）。

さらに、国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究事業」及び「生徒指導リーフ」等において、新規数を抑制するためには、「未然防止」と「初期対応」の取組（図4）があるが、不登校の兆しの見えた児童生徒に対する「初期対応」はもちろんのこと、全ての児童生徒を対象とした集団支援となる「未然防止」の取組を進めていくことの必要性も述べられている。

しかし、依然として新規数が増加していることから、不登校の未然防止の取組が徹底されていない、もしくは浸透していないことが推察される。

そこで、県内の学校で広く活用されており、児童生徒の学校適応感が把握できる「学校楽しいと」

を活用し、適切なアセスメント*1)の方法と取組の点検の指標としての活用方法を広く提供することで、全ての児童生徒に対する集団支援の取組の充実を図ることができないかと考えた。

以上のことから、本研究では、不登校を未然に防ぐ開発的・予防的な生徒指導の視点を踏まえ、「学校楽しいと」を活用し、「学校が児童生徒の学校適応感を高めるための取組を重点的・組織的・継続的に行うことで、不登校の未然防止等につながるのではないか。」と仮説を立て、学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組について、全ての児童生徒を対象とした集団支援の取組に焦点を絞り、研究していくことにした。

2 研究の内容

本研究の内容は次のとおりである。

研究内容Ⅰ	不登校の未然防止に関する調査及び結果分析・考察
	○ 児童生徒の学校適応感に影響を及ぼす要因の把握 ○ 不登校の未然防止に関する教諭等の意識や学校の取組と学校適応感との関連性
研究内容Ⅱ	重点的・組織的・継続的な取組（調査研究協力校の実践）
	○ 学校適応感を高めるための学校の具体的な取組

不登校の未然防止に効果のある取組	
○	授業や行事等を通じた「居場所づくり」と「絆づくり」の取組
○	教職員の取組を点検するための指標となる重点項目の設定
○	生徒指導のPDCAサイクル（PDCA×3）に基づく継続的な取組

「魅力ある学校づくり調査研究事業」
文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター

図3 不登校未然防止に効果のある取組

効果基準	観点	対象	主たる取組
新規数の抑制	未然防止	全ての児童生徒	集団支援
	初期対応	兆しの見えた児童生徒	集団支援 個別支援
継続数の減少	自立支援	不登校児童生徒	個別支援

図4 不登校対応の効果基準と観点等

*1) 支援方針・支援策を検討するために、必要な情報を収集・共有・判断・検証して多面的に理解するプロセスのこと。

第3章 不登校の未然防止に向けた重点的・組織的・継続的な取組の在り方

1 重点的・組織的・継続的な取組の相互作用

「学校楽しいーと」を活用したアセスメントを通して、重点的・組織的・継続的な取組を徹底することで、それぞれの取組が相互に作用して不登校の未然防止につなげていく（図5）。

期待される重点的・組織的・継続的な取組の相互作用

○ 重点的な取組

「学校楽しいーと」の六つの観点の中から重点的に取り組む観点（以下「重点的な観点」という。）を「チーム」で検討・設定〔組織的な取組〕し、継続した取組を行う〔継続的な取組〕ことで、学校適応感全体が高まる。

○ 組織的な取組

学校、学年、学級の課題や全ての児童生徒に対して、日頃から「チーム」で支援していくとともに、普段行っている取組について「重点的な観点につながる〔重点的な取組〕。不登校の未然防止につながる。」と意識することで、共通理解と共通実践が深まる。

○ 継続的な取組

〔Research（調査）→Plan（計画）→Do（実行）→Check（点検）→Act（改善）〕の「検証改善サイクル（R-PDCA）」〔継続的な取組〕を基準にして、「チーム」で改善を図りながら進める〔組織的な取組〕ことで、取組全体の進化につながる。



図5 重点的・組織的・継続的な取組の相互作用による不登校の未然防止

2 「学校楽しいーと」の活用

「学校楽しいーと」は、平成24年度に当センター教育相談課が開発した児童生徒の学校適応感を六つの観点（「友達との関係」、「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」）から把握することができる質問紙である。児童生徒の回答結果を分析することで不登校やいじめ、問題行動等の未然防止を図ることができる（図6）。

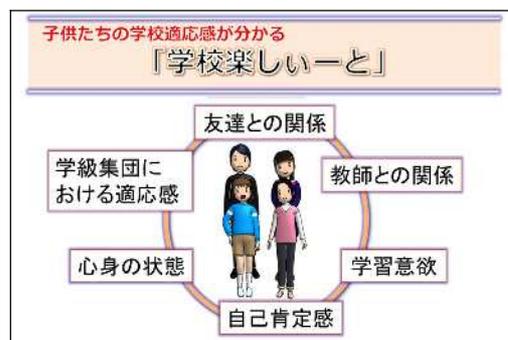


図6 「学校楽しいーと」の六つの観点

「学校楽しいーと」の実施後は、その結果について丁寧なアセスメントを行い、学校適応感を高める取組を行わなければならない。取組の際のポイントと対応策の例は次のとおりである（図7）。

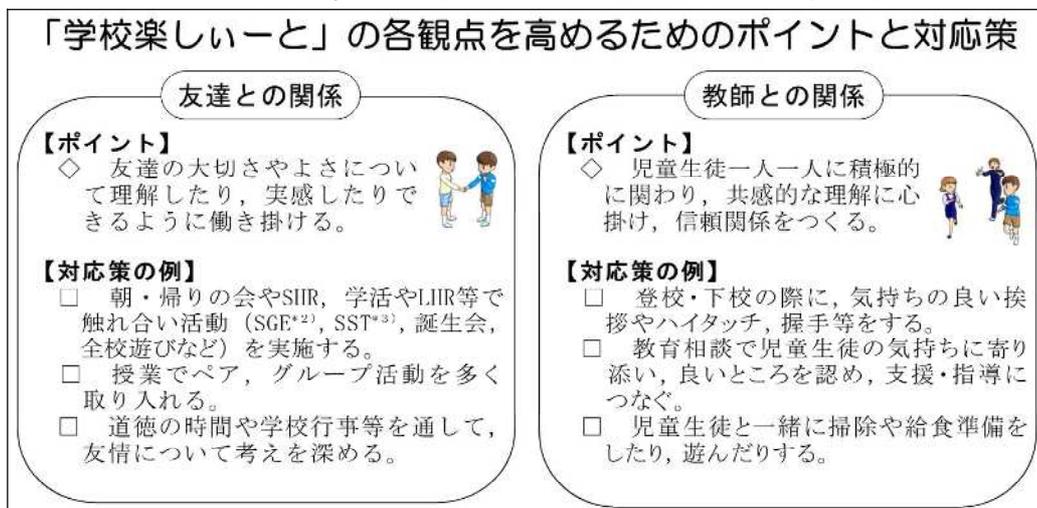


図7 各観点を高めるためのポイントと対応策の例（一部抜粋：【参考資料2】参照）

「学校楽しいーと」を取組の点検をするための指標となる質問紙と捉え、チームによるアセスメントを通して、不登校の未然防止に向けた重点的・組織的・継続的な取組を進めていく必要があると考える。

3 重点的な取組の在り方

不登校の未然防止に効果があるとされる取組の一つに、調査結果を基に教諭等の取組を点検するための指標となる重点項目を設定し、焦点化して児童生徒の状況を改善していく取組がある。つまり、調査結果を基にした重点項目の設定と重点項目に関する目標を達成するための取組を学校全体で実施していくことは、不登校の未然防止につながると言える。

そこで、「学校楽しいーと」の学校適応感を測る六つの観点の中から重点的な観点を「チーム」（組織的）で検討・設定し、継続した取組（継続的）を行うことで、学校適応感を高めていく。

なお、「学校楽しいーと」の六つの観点は、当センターの調査で観点同士に関連が見られている。例えば、「友達との関係」が高まるにつれて、高まる観点もある（図8）。このことから、重点的な観点を設定する際には、ウィークポイントとなった観点を重点的な観点とする考え方もあるが、ストロングポイントを重点的な観点として高めることで、ウィークポイントを補い、学校適応感を高めるという考え方も効果的である。

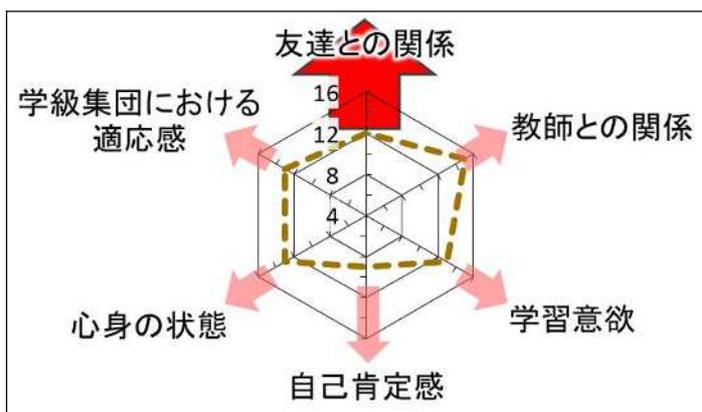


図8 関連性のある六つの観点

チームでしっかりアセスメントし、各学校の教育目標や児童生徒の日頃の学校生活も考慮して設定したい。

*2) 構成的グループエンカウンター
*3) ソーシャルスキルトレーニング

4 組織的な取組の在り方

全ての教育活動は、学校職員全体の共通理解が不可欠であり、組織的に進めていくことで、徹底した取組につながっていく。不登校の未然防止の取組は、全ての児童生徒を対象にした取組であることから、全ての教職員で取り組むことは必然と言える。

そのためには、普段から同僚性を高め、何事も協力してチームとして取り組むことができる教職員体制「校内支援チーム」を構築しておくことが大切である（図9）。



図9 「チーム」による取組

また、「学校楽しいと」等のアセスメントや重点的な取組の検討、気になる事例の検討等をするための会議（学年部会、生徒指導部会、不登校対策委員会など）を定期的で開催することで、チームとしての情報共有の機会となり、早い対応につなげることができる。

さらに、「全ての教育活動が不登校の未然防止につながる。」と意識して教育活動を行うことも大切である。私たちは普段から様々な教育活動を児童生徒と共に行っている。これらの充実が児童生徒の学校適応感を高め、新たな不登校児童生徒を生まないことにつながるものと全教職員が意識して取り組むことで、「チーム」による共通理解と共通実践が深まり、全ての児童生徒に対する組織的な支援につながっていく（図10）。

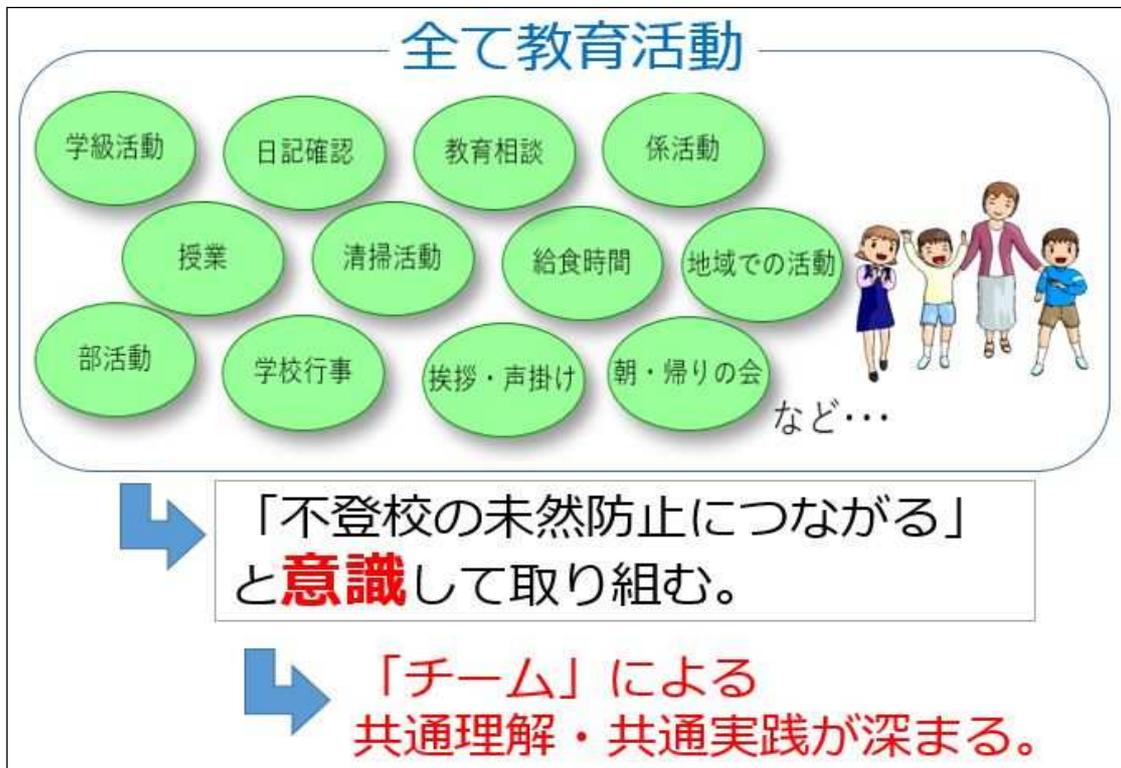


図10 未然防止を意識した「チーム」による支援

*4) スクールカウンセラー
*5) スクールソーシャルワーカー

5 継続的な取組の在り方

不登校の未然防止の取組は、「Research（調査）→ Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（点検）→ Act（改善）」の検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）を基準に、「チーム」で改善を図りながら進めていくことで、取組全体の成果（不登校児童生徒数，新規数の減少）につなげる（図11）。

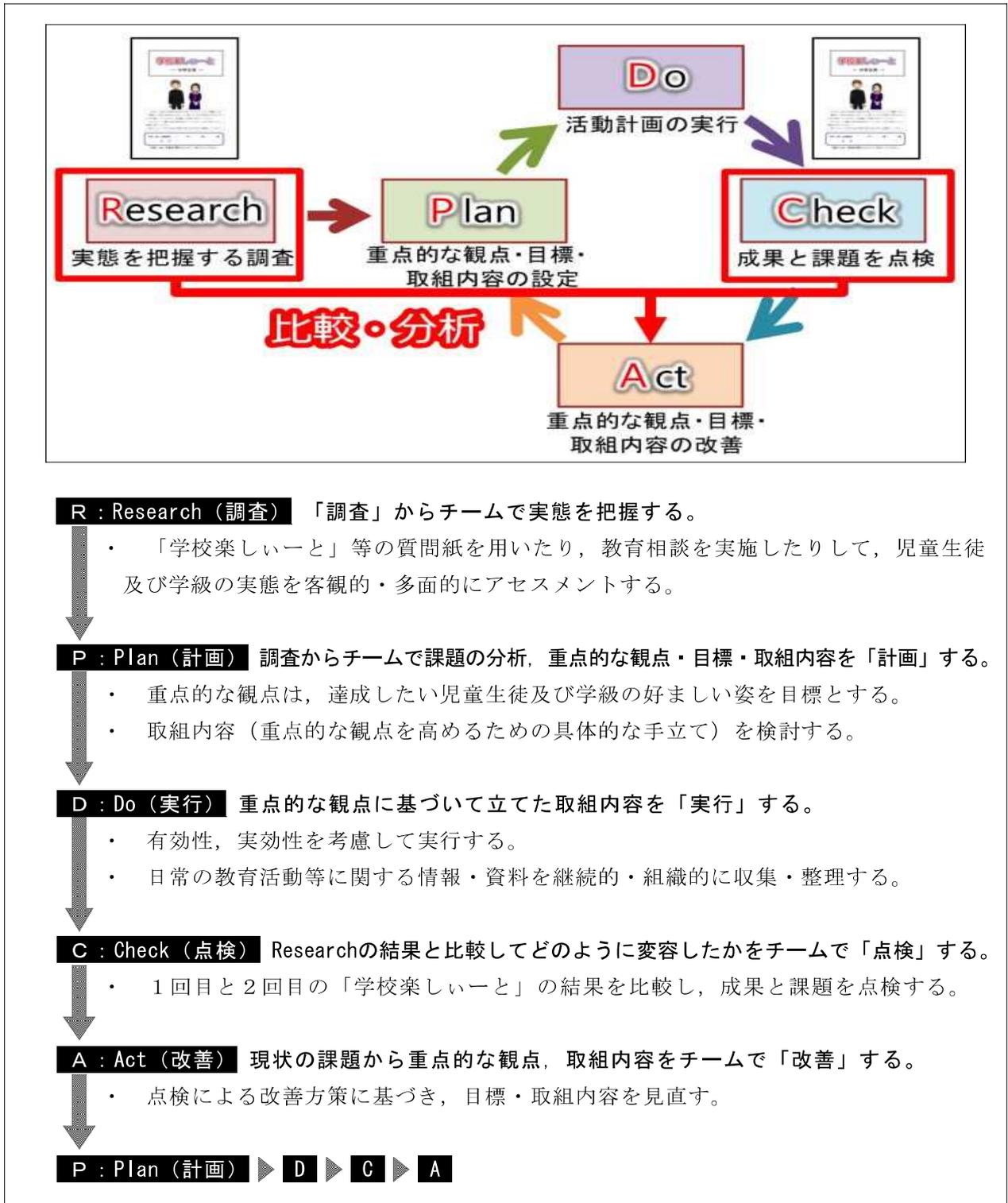


図11 「学校楽しいと」を活用したR-PDCAサイクルモデル

第4章 不登校の未然防止に関する調査及び結果分析・考察

1 調査の実施

県内の児童生徒の実態や教諭等の意識、学校の取組状況を把握するために、研究協力員在籍校及び県下各地区から抽出した小学校、中学校、高等学校で調査を行った（令和元年7月実施、表1）。なお、調査の対象を小学校5年生、中学校2年生、高等学校2年生、教諭等及び管理職とした。

【調査1】は児童生徒を対象とし、「学校楽しいーと」や学校回避感情に関する質問を含む児童生徒の実態について、【調査2】は教諭等を対象とし、不登校の未然防止に関する意識について、【調査3】は管理職を対象とし、不登校の未然防止に関する学校の取組状況について調査した（図12）。

表1 調査実施校と回答数

校種	実施校数※1	児童生徒回答者数	教諭等回答者数※2	管理職回答者数
小学校	17校	1,021人	304人	17人
中学校	17校	1,474人	326人	17人
高等学校	8校	1,176人	298人	8人
合計	42校	3,671人	928人	42人

※1 調査実施校は、県下各地区から39校、調査研究協力校3校。
 ※2 管理職を除く。

	【調査1】 児童生徒回答：学校生活についての実態調査 （「学校楽しいーと」を含む。） 「学校に行きにくい、または行きたくないと感じることがありますか。」など
	【調査2】 教諭等回答：不登校の未然防止に関する意識調査 「児童生徒が不登校になる主な要因は何だと思いますか。」など
	【調査3】 管理職回答：不登校の未然防止に関する取組調査 「不登校の未然防止の取組について、全職員で進めていることがありますか。」など

図12 調査の概要

2 調査結果

(1) 【調査1】児童生徒回答：学校生活についての実態

質問項目のリード文は、「学校生活について質問をします。今のあなたの気持ちや考えを教えてください。」とし、「学校楽しいーと」の質問項目と学校回避感情に関する質問項目について、「よくある」、「ときどきある」、「ほとんどない」、「ない」等の四件法の選択式で回答を求めた。

ア 学校適応感（「学校楽しいーと」質問項目）

小学校・中学校・高等学校の「学校楽しいーと」の六つの観点の値を比較すると、どの校種においても「友達との関係」（質問項目「学校には、気軽に話せる友達がいる。」「学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。」「学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」「自分が困っているときに助けてくれたり、協力してくれたりする友達がいる。」）の値が高く、「心身の状態」（質問項目「落ち込むことがある。」「おなか痛くなったり、下痢をしたりする。」「頭が痛くなる時がある。」「気分が悪くなる時がある。」）の値が低くなっている（図13）。

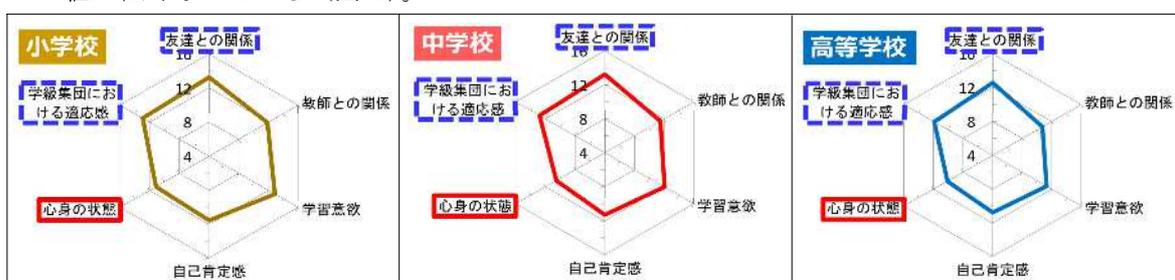


図13 小学校・中学校・高等学校の「学校楽しいーと」の結果

イ 学校回避感情

(7) 学校回避感情の有無

学校回避感情について、「学校に行きにくい、または行きたくないと感じることがありますか。」の質問では、「よくある」、「ときどきある」と回答した割合は、小学校32.2%、中学校35.9%、高等学校47.3%であった（図14）。

(4) 学校回避感情が「よくある」、「ときどきある」と答えた理由

「学校に行きにくい、または行きたくない（学校回避感情）」と感じる理由は、小学校では「友達」、中学校・高等学校では「なんとなく」が最も多い。小学校・中学校・高等学校全体では「なんとなく」、「授業」、「友達」という順であった（図15）。

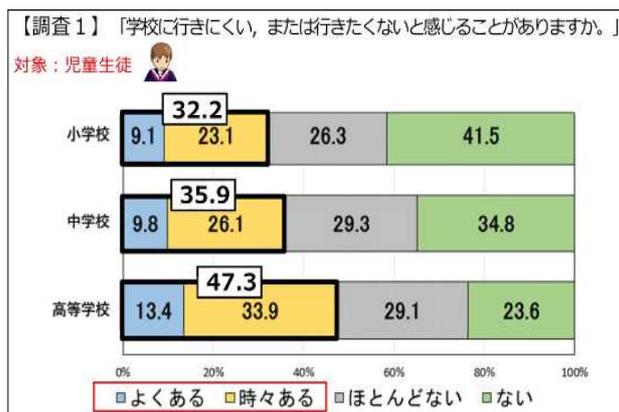


図14 学校回避感情の有無

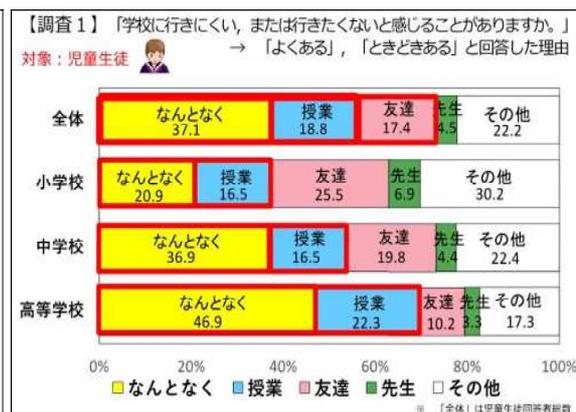


図15 学校回避感情が「ある」と答えた理由

ウ 結果分析

- ・ 小学校、中学校、高等学校の「学校楽しいと」の結果の六つの観点のバランスに注目すると、どの校種においても「友達との関係」、「学級集団における適応感」の値は高く、「心身の状態」の値が低い（図13）。
- ・ 「学校に行きにくい、または行きたくないと感じる。」の理由として、「なんとなく」と感じている児童生徒が最も多く、続いて「授業」、「友達」と感じている児童生徒が多い（図15）。

(2) 【調査2】教諭等回答：不登校の未然防止に関する意識

ア 不登校の主な要因

質問項目のリード文は、「児童生徒が不登校になる主な要因は何だと思いますか。考えられる主な要因を一つ選んでください。」とし、以下の選択項目より一つ選ぶ選択式で回答を求めた。

— 選択項目 —

- ① いじめ
- ② いじめを除く友人関係をめぐる問題
- ③ 教職員との関係をめぐる問題
- ④ 学業の不振
- ⑤ 進路に係る不安
- ⑥ クラブ活動・部活動等への不適応
- ⑦ 学校のきまり等をめぐる問題
- ⑧ 入学・転編入学・進級時の不適応
- ⑨ 家庭に係る状況
- ⑩ その他

教諭等が考える「児童生徒が不登校になる主な要因」は、小学校と中学校では、「家庭に係る状況」が最も多く、高等学校では、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が最も多い。一方で、「学業不振」を不登校になる主な要因と捉えている教諭等は、小学校、中学校、高等学校ともに少ない（図16）。

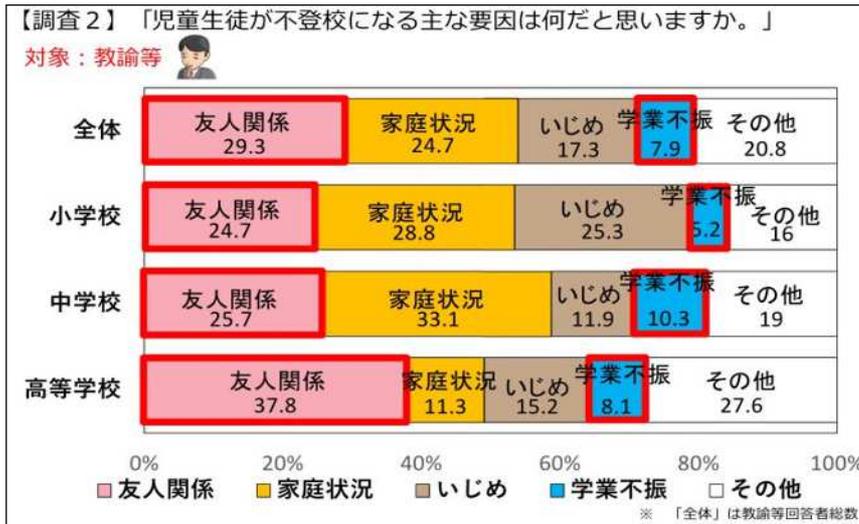


図16 教諭等が捉える不登校の主な要因

イ 不登校の未然防止の取組についての意識

質問項目のリード文は、「あなたは、不登校の未然防止の取組として、以下の項目について、どのように感じていますか。」とし、「非常に効果的である」、「どちらかというと効果的である」、「どちらかというと効果的でない」、「全く効果的でない」の四件法の選択式で回答を求めた。

全体としては、「保護者等との連携」の意識が最も高い。一方で、「質問紙の活用」、「教室以外の学習の場」、「授業改善」などの意識が低い。また、「友人関係改善の支援」や「教室以外の学習の場」など、校種において不登校の未然防止の取組に関する意識に差が見られた（図17）。

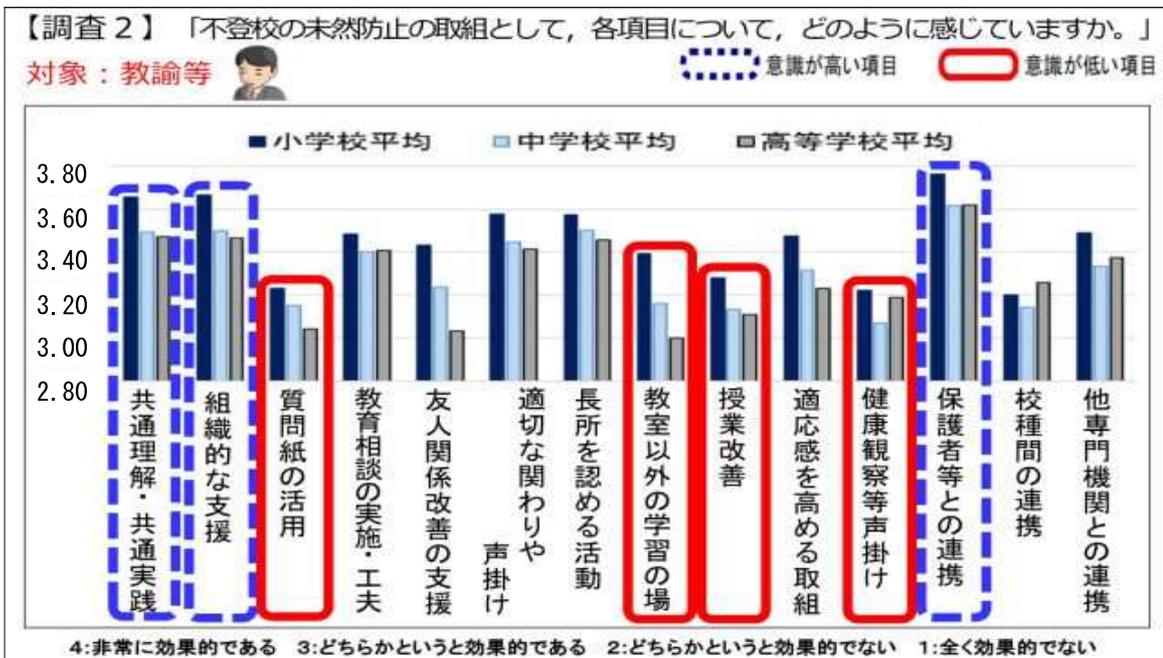


図17 不登校の未然防止の取組に関する教諭等の意識

ウ 結果分析

- ・ 不登校になる要因を「友人関係」と捉えている教諭等は多く、「学業不振」と捉えている教諭等は少ない（図16）。
- ・ 未然防止の取組に関する意識として、「質問紙の活用」、「健康観察等声掛け」、「授業改善」、「教室以外の学習の場」の意識が低い（図17）。
- ・ 不登校になる主な要因や未然防止の取組の効果について、校種間で意識の相違が見られる（図16, 図17）。

(3) 【調査3】管理職回答：不登校の未然防止に関する取組

ア 未然防止の取組

質問項目のリード文は、「あなたの学校では、不登校の未然防止のために、以下の項目について、どの程度取り組んでいますか。」とし、「積極的に取り組んでいる」、「どちらかというに取り組んでいる」、「どちらかというに取り組んでいない」、「全く取り組んでいない」の四件法の選択式で回答を求めた。

全体として、「共通理解・共通実践」、「組織的な支援」、「保護者等との連携」がよく取り組まれている。一方で、「適応感を高める取組」については、全体的にあまり取り組まれておらず、特に高等学校で取り組まれていない。また、「適応感を高める取組」など、多くの項目で校種において取組状況に違いが見られた（図18）。

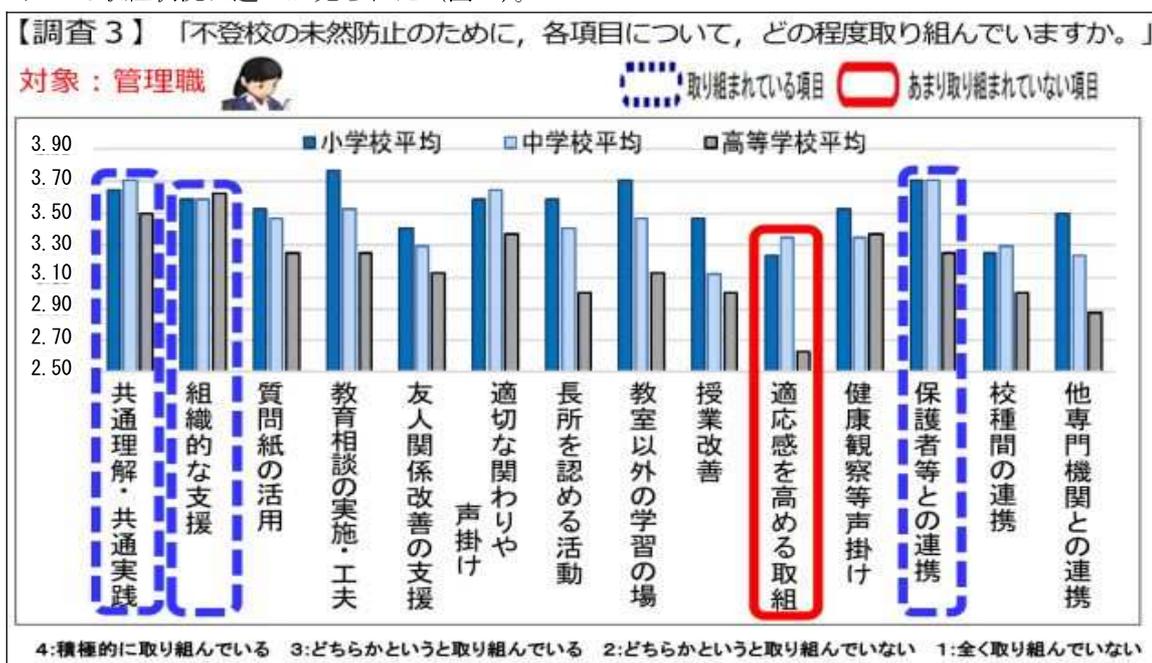


図18 不登校の未然防止の取組状況

イ 結果分析

- ・ 「共通理解・共通実践」、「組織的な支援」、「保護者等との連携」などの組織的な取組はなされているが、「適応感を高める活動」などの開発的・予防的な取組はあまりなされていない（図18）。
- ・ 項目によって、校種間で不登校の未然防止の取組状況に違いが見られるものもある（図18）。

(4) 児童生徒の実態と教諭等の意識の相違（【調査1】，【調査2】の結果より）

児童生徒が学校に行きたくない理由と、教諭等が不登校になると考えている要因を比較すると、児童生徒の実態と教諭等の意識の相違が見られる。

特に、学校に行きたくない理由として「授業」と回答した児童生徒が多いことに対して、「授業」に関係があると考えられる「学業不振」を不登校の要因として捉えている教諭等は少ない（図19）。

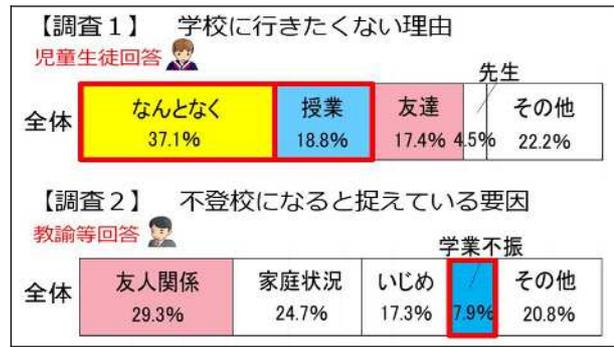


図19 児童生徒の実態と教諭等の意識の比較

(5) 教諭等の意識と実際の実施の相違（【調査2】，【調査3】の結果より）

不登校の未然防止の実施に関する意識と実際の実施状況の相違、校種間での相違が見られる。

特に、「質問紙の活用」、「教室以外の学習の場」、「健康観察等声掛け」など全体的に取り組まれている（図18）が、教諭等の意識は低い（図17）。

また、高等学校において、「適応感を高める取組」についての教諭等の意識は比較的高い（図17）が、取組はあまりされていない（図18）。

3 考察

児童生徒の学校回避感情について、注目すべきは、「学校に行きにくい、または行きたくないと感じる」理由として、「なんとなく」と回答している割合が最も多いこと、その次に「授業」と回答している割合が多いことである。

まず、「なんとなく」と回答している背景には、学校に行きたくないと思った要因が複合化しており、本人も明確な理由が分からず悩んでいることが考えられる。しかしながら、その理由への気づきにつながる「質問紙の活用」や「健康観察等声掛け」についての教諭等の意識が低い。そこで、「学校楽しいーと」等の質問紙を用いた児童生徒のアセスメントを丁寧に行うことの重要性を教諭等に訴えていく必要がある。

次に、「授業」と回答している背景には、教諭等が認識している以上に「授業」や「学業不振」が不登校の要因として大きく影響していることが考えられる。児童生徒にとって、「授業」が学校回避感情に与える影響が非常に大きいことから、児童生徒のアセスメントをより丁寧に行うとともに、不登校の未然防止につながると意識した「友達」、「友人関係」を考慮した取組の他に、「授業」、「学業不振」への対応が必要である。

指導・支援に向けて

- ・ 不登校の未然防止に関する児童生徒の意識、教諭等の意識及び学校の取組状況に相違が見られることから、「学校楽しいーと」等の質問紙を用いた児童生徒のアセスメントを丁寧に行う必要がある。
- ・ 不登校の未然防止のための重点的な観点を設定し、学校・学級において、教諭等が「チーム」として意識して継続的（R-PDCAサイクル）な取組を進める必要がある。

第5章 学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組

1 小学校における重点的・組織的・継続的な取組の実践

「友達との関係」を重点的な観点とし、学級を中心に学年全体でR-PDCAに沿って取り組んだ。

R : Research (調査)

- 1回目の「学校楽しいーと」の実施（令和2年7月，3年生82人回答）

表2 学年の「学校楽しいーと」の各観点の平均値

観点	1回目
友達との関係	13.0
教師との関係	12.3
学習意欲	12.4
自己肯定感	11.5
心身の状態	10.5
学級集団における適応感	13.3

※ 最大値16

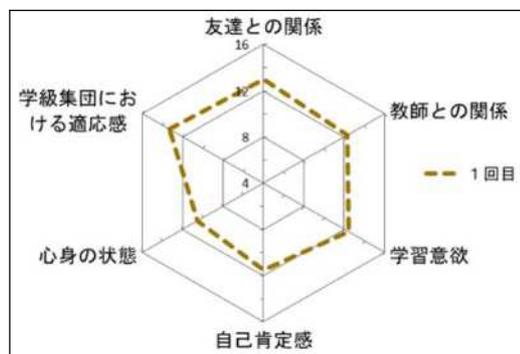


図20 学年平均値レーダーチャート

表2，図20より，「友達との関係」，「学級集団における適応感」がやや高い。しかし，内容項目の「学校には，自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」，「自分が困っているときに助けてくれたり，協力してくれたりする友達がいる。」がやや低くなっている。友達同士で気軽に交流することはできるが，悩みや本音をあまり話せないことがうかがえる。

また，「心身の状態」，「自己肯定感」が低い状況にあり，個票において各項目で「1」を付けている児童もいることから，学校生活を送る上で満足度の低さが懸念される。

P : Plan (計画)

- 「重点的な観点」・「目標」・「取組内容」の設定

〔重点的な観点〕

「友達との関係」

「学校楽しいーと」の結果から，全体としては「友達との関係」の値が高い状況ではあることが分かる。しかし，友達との関わりが大きくなる発達の段階にある学年の実態として，児童同士での行き違いやトラブルも見られることから，「友達との関係」を更に高める必要がある。級友との触れ合いや活動により対人関係を深めるために，意図的に関係づくりの場を設定していきたい。また，「心身の状態」や「自己肯定感」がやや低い傾向にあり，個によっては項目で低い値も見られる。「友達との関係」づくりを主軸としながら，一人一人がよさを実感し，認められるような取組も必要である。

〔目標〕

学級・学年・全校での人間関係づくりへの取組を通して，「友達との関係」を高める。

〔取組内容〕

- ・ ソーシャルスキルトレーニング（SST）や構成的グループエンカウンター（SGE）の実施
- ・ 学習の場での友達関係づくり
- ・ 日常の場での友達関係づくり
- ・ 学校行事を通じた学年・学校全体での取組

D : Do (実行)

- SST・SGEを通じた人間関係づくりモデルプラン
他者とのよりよい関係を築くために、SST・SGEの授業プランを作成して実践した(表3, 表4)。

表3 SST(学級活動・総合的な学習の時間)

時	活動名
1	ふわっと言葉・ちくっと言葉
2	相手の気持ちを想像しよう
3	笑顔でエラー
4	自分の感情や気持ちに気付こう
5	自分を好きになろう

表4 SGE(朝活動, 各教科等)

時	活動名
1	サッカーじゃんけん(体育)
2	カム・オン(体育)
3	ぼくのこと, わたしのこと(学活)
4	私はわたしよ(朝活動)
5	ありがとうカード(朝活動)

- 学習の場での友達関係づくり
グループ活動前にアイスブレイクをしたり, 互いの考えを交流する場を設定したりした。
- 日常の場での友達関係づくり
係活動を通し, 自分たちで主体的に協力し合いながら活動できる場づくりに努めた。
- 学年・学校全体での取組
委員会児童が計画し, 昼休みにクラスマッチや学級遊びを実施した。

C : Check (点検)

- 2回目の「学校楽しいと」の実施(1回目令和2年7月, 2回目令和2年12月, 3年生78人回答)

表5 学年の「学校楽しいと」の各観点的比較

観点	1回目	2回目
友達との関係	13.0	13.7
教師との関係	12.3	12.3
学習意欲	12.4	13.0
自己肯定感	11.5	11.9
心身の状態	10.5	11.6
学級集団における適応感	13.3	13.5

※ 最大値16

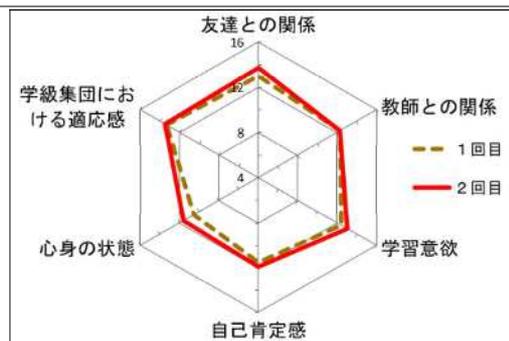


図21 学年平均値レーダーチャート

表5, 図21より, 学年の1回目と2回目の平均値を比較すると, 「友達との関係」が高くなっている。また, 「学習意欲」, 「自己肯定感」, 「心身の状態」, 「学級集団における適応感」も高まっており, 「友達との関係」が, 他の観点にもよい影響を与えたのではないと思われる。さらに, 学級ごとに見てみると, 「教師との関係」, 「学級集団における適応感」がやや低くなっている学級があることから, 更に, 学級集団や個々に対しての支援, SST・SGTの取組を継続していく。

A : Act (改善)

- 成果と課題から, 取組内容について見直し・改善を図る。

【成果】

- ・ 友達とのよりよい関係づくりへの関心や意欲が高まっていることがうかがえる。
- ・ 児童同士が対話やコミュニケーションが図れるようになってきた。
- ・ 不登校傾向にある児童や保健室登校の児童の状況に改善が見られた。

【課題】

- ・ 計画をもっと練り上げておく必要があった。教育課程への適切な位置付けを再検討したい。
- ・ アセスメントをより丁寧に行い, 個別の指導, 支援を継続していく必要がある。

P : Plan (計画) ▶ D ▶ C ▶ A

2 中学校における重点的・組織的・継続的な取組の実践

「友達との関係」、「学級集団における適応感」を重点的な観点とし、学年部のチームを中心に学校全体でR-PDCAに沿って取り組んだ。

R : Research (調査)

- 1回目の「学校楽しいーと」の実施（令和2年7月，3年生94人回答）

表6 学年の「学校楽しいーと」の各観点の平均値

観点	1回目
友達との関係	13.6
教師との関係	12.0
学習意欲	12.6
自己肯定感	12.2
心身の状態	11.3
学級集団における適応感	13.4

※ 最大値16

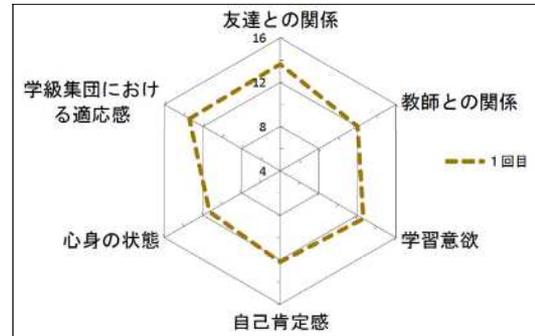


図22 学年平均値レーダーチャート

表6，図22より，「友達との関係」，「学級集団における適応感」が比較的高い。「心身の状態」，「教師との関係」，「自己肯定感」がやや低い。比較的值の高かった観点の内容項目に注目すると，「友達との関係」の内容項目「自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」と「学級集団における適応感」の内容項目「目標やルールが大切にされているので，安心して居心地よく過ごせる。」がやや低いことが懸念される。

P : Plan (計画)

- 「重点的な観点」・「目標」・「取組内容」の設定

〔重点的な観点〕

「友達との関係」，「学級集団における適応感」

「学校楽しいーと」の結果によると，「心身の状態」，「教師との関係」，「自己肯定感」に課題が感じられる。一方で，生徒は学級集団には適応しており，友達との関係も良好である。そこで，この2観点を学年のストロングポイントと捉え，ストロングポイントを更に強化することによって，比較的数字の低い観点についても向上させていく必要がある。

また，不登校の未然防止に向けたチームとしての取組を具体的に示し，「絆づくり」としての構成的グループエンカウンター等の取組や「居場所づくり」としての教師側の適切な関わりを促す仕掛けをすることで，学校全体として生徒の自己有用感や達成感，充実感を高め，不登校の未然防止を図っていききたい。

〔目標〕

学年部を中心に，学校全体で「絆づくり」や「居場所づくり」の取組を通して，「友達との関係」，「学級集団における適応感」を高める。

〔取組内容〕

- ・ 構成的グループエンカウンター (SGE)
- ・ 「みんなで遊ぼうDAY」
- ・ 学年・学級における「リーダー会」
- ・ SDGsの取組
- ・ 縦割りグループによる清掃活動
- ・ 帰りの会における「褒め言葉のシャワー大作戦」
- ・ 生徒会や生徒ボランティアによる「エアタッチ・ひじタッチ大作戦」

D : Do (実行)

- 学級適応感を向上させるための構成的グループエンカウターの実践
全学年において、合唱コンクールに向けた「共同コラージュ」等、年間6回実施した。
- 生徒の活躍の場の設定
リーダー会やあいさつ運動、ごみ拾い活動など、生徒主体の活動を支援した。
- 生徒同士をつなぐ授業改善の取組
「学校が楽しい。」「学校に行きたい。」と思えることにつながる学び合いを実施した。
- 「みんなで遊ぼうDAY」の取組
生徒会主導で月に1回、昼休みの時間を使って学級全員でレクリエーション活動を行った。
- 縦割りグループによる「黙々清掃」の取組
3年生がリーダーとなり、後輩たちに指示しながら担当場所の清掃を無言で行った。
- 生徒会による登校推進の取組
今年度は感染症拡大防止のため、登校時に「エアタッチ・ひじタッチ大作戦」を行った。
- 「褒め言葉のシャワー大作戦」の取組
帰りの学活の時間に生徒が友達のよいところをできるだけたくさん挙げる取組を行った。

C : Check (点検)

- 2回目の「学校楽しいと」の実施（1回目令和2年7月，2回目令和2年11月，3年生99人回答）

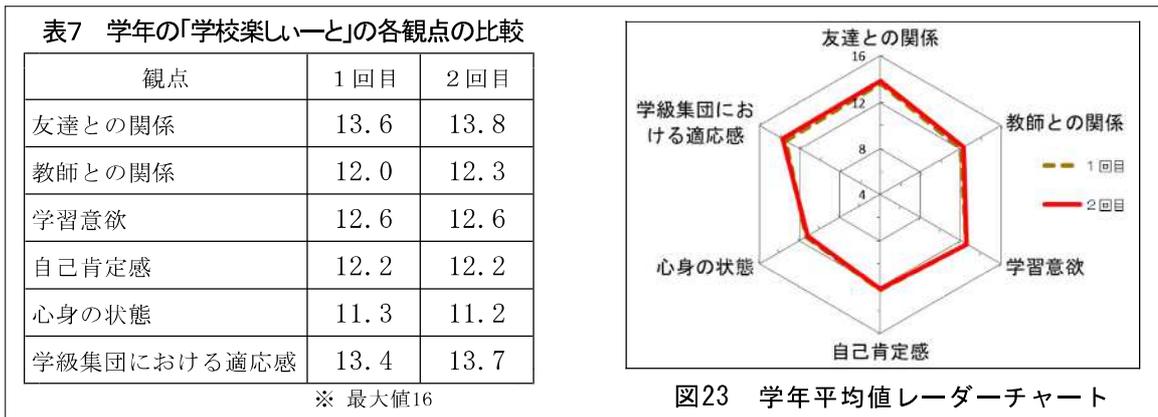


表7，図23より，「学校楽しいと」の各観点を比較すると，重点的な観点の「学級集団における適応感」と「友達との関係」については，数値が上がっている。また，「教師との関係」も数値が上がっている。一方で，「学習意欲」，「自己肯定感」の数値は変化が見られず，「心身の状態」の数値はわずかであるが下がっている。継続した取組の成果が表れてきていると考えられる。

A : Act (改善)

- 成果と課題から，取組内容について見直し・改善を図る。

【成果】

- ・ SGEの実践や縦割りグループによる「黙々清掃」等を通して，リーダーとして新たに頑張ろうという積極的な行動が見られるようになった。
- ・ 生徒会による登校推進の取組等により，生徒の笑顔が増えた。
- ・ 不登校生徒総数及び新規の不登校生徒数が減少した。

【課題】

- ・ より成果が表れるよう，内容等の見直しや新たな取組について検討する必要がある。
- ・ 不登校の初期対応についても，これまで以上に意識して取り組む必要がある。

P : Plan (計画) ▶ D ▶ C ▶ A

3 高等学校における重点的・組織的・継続的な取組の実践

「友達との関係」、「学級集団への適応感」を重点的な観点とし、学校全体でR-PDCAに沿って取り組んだ。

R : Research (調査)

- 1回目の「学校楽しいーと」の実施（令和2年6月、全校生229人回答）

表8 学年の「学校楽しいーと」の各観点の平均値

観点	1回目
友達との関係	12.4
教師との関係	11.0
学習意欲	11.3
自己肯定感	10.5
心身の状態	9.9
学級集団における適応感	12.1

※ 最大値16

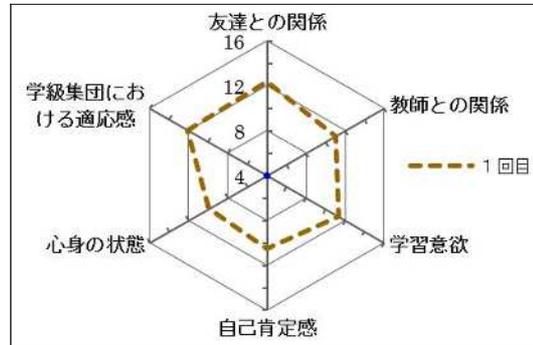


図24 学年平均値レーダーチャート

表8、図24より、「友達との関係」、「学級集団における適応感」の値が比較的高く、「自己肯定感」、「心身の状態」の値がやや低い。さらに、観点ごとの項目を分析してみると、「学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」、「学級は、目標やルールが大切にされているので、安心して居心地よく過ごせる。」が他の項目より低く、このことが、「自己肯定感」や「心身の状態」の低さに影響しているのではないかと推測される。

P : Plan (計画)

- 「重点的な観点」・「目標」・「取組内容」の設定

〔重点的な観点〕

「友達との関係」、「学級集団における適応感」

「学校楽しいーと」の結果から、「友達との関係」、「学級集団における適応感」が比較的高く、この二つの観点が本校のストロングポイントであると捉えることができる。しかし、先述したとおり、「学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」、「学級は、目標やルールが大切にされているので、安心して居心地よく過ごせる。」が低いので、特にこの2点に注意する必要がある。そこで、「友達との関係」、「学級集団における適応感」を重点的な観점에設定し、目標やルールを明確にしながら、友達を認め合う活動を中心に、本校の教職員が不登校未然防止に効果的であると考えている「教諭等の積極的な関わりや声掛け」、「長所を認める活動」を組み合わせた「学級への帰属意識を高める取組」を実践することで、生徒の学校適応感を高めていきたい。

〔目標〕

学校全体で「学級への帰属意識を高める取組」を通して、「友達との関係」、「学級集団への適応感」を高める。

〔取組内容〕

- ・ 生徒理解を深めるための教育相談の工夫
- ・ 構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの実施
- ・ クラス句会の実施（国語科）
- ・ ルーブリックを用いたパフォーマンスの相互評価

D : Do (実行)

- 生徒理解を深めるための教育相談の工夫
「学校楽しいーと」のアセスメントについて職員研修を実施し、「学校楽しいーと」の結果(個票)を活用した教育相談を実施した。
- 構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングの実施
LHR等において、3回(「仲間づくりの活動」,「みんなで結論を導こう」,「リフレーミングー友達の短所を長所にー」)にわたって実施した。
- クラス句会の実施
国語総合において、互いの感性を認め合い、友達との関係を高めることをねらいとしたクラス句会を実施した。
- ルーブリックを用いたパフォーマンスの相互評価
国語表現やコミュニケーション英語Ⅲにおいて、ルーブリックを用いたパフォーマンスの相互評価を取り入れた授業に取り組んだ。

C : Check (点検)

- 2回目の「学校楽しいーと」の実施(1回目令和2年6月,2回目令和2年10月,全校生徒225人回答)

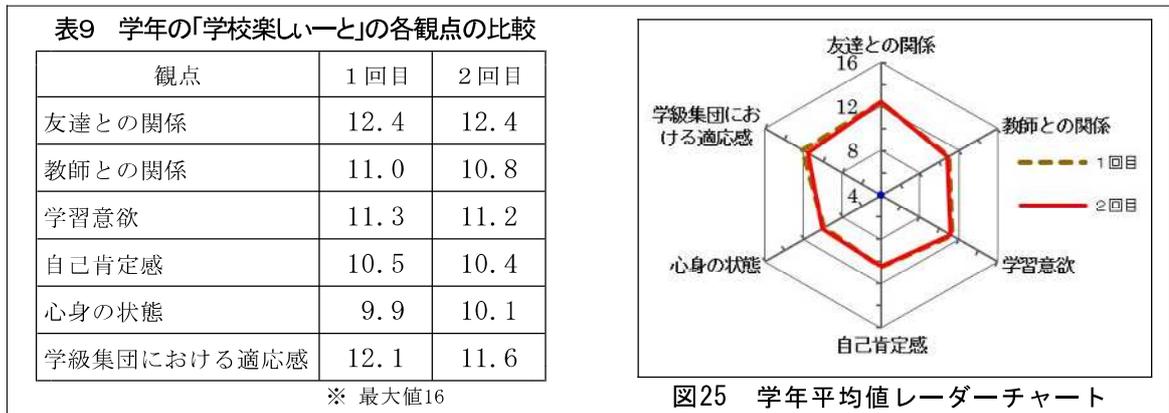


表9, 図25より, 重点的な観点の「友達との関係」は維持されているが, 「学級集団における適応感」の値はわずかに下がった。逆に, ウィークポイントであった「心身の状態」の値はわずかに上がっている。さらに, 観点ごとの内容項目に着目すると, 「学校には, 自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。」の値が上がっている学級が多くあり, 様々な取組を通して自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達を見付けることができた生徒が増えていると推測される。

A : Act (改善)

- 成果と課題から, 取組内容について見直し・改善を図る。

【成果】

- ・ 自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達をつくることができた生徒が増えている。
- ・ 自らの役割を認識し, 率先して学級をリードしてくれる生徒が増えている。
- ・ 昨年度不登校傾向にあった複数の生徒の欠席日数が大幅に減った。

【課題】

- ・ どの時期にどのような取組を実践すればより効果的であるかを検討する必要がある。
- ・ 普段の教育活動が不登校の未然防止につながることをより意識する必要がある。

P : Plan (計画) ▶ D ▶ C ▶ A

第6章 研究の成果と課題

本研究は、令和元年度から2年間にわたり『学校楽しいーと』を活用した不登校の未然防止に関する研究―学校適応感を高めるための重点的・組織的・継続的な取組を通して―を研究主題として調査研究を進めてきた。ここでは、その成果と課題を述べる。

1 研究の成果

- 不登校の未然防止を目的とした児童生徒理解のために、教諭等が「学校楽しいーと」等の質問紙を丁寧にアセスメントして活用することで、個人や学級、学年に応じた適切な対応につながっていくことを示すことができた。
- 六つの観点の中から重点的な観点を設定し、組織的に継続して取り組んでいくことで、児童生徒の学校適応感を高め、不登校の未然防止につながることを提案することができた。

2 今後の課題

- 不登校児童生徒数は依然として増加の傾向にあることから、不登校の未然防止の取組を継続するとともに、不登校の兆候が見られる児童生徒への初期対応について、更なる研究が必要である。
- 本調査結果や取組事例等を集約し、県内の学校に広く周知することにより、不登校の未然防止の取組が推進され、不登校児童生徒数の減少につながることを望まれる。

おわりに

不登校児童生徒数は年々増加傾向にあり、多くの学校において、生徒指導上の課題の一つになっている。このような現状を踏まえ、当課では児童生徒の学校適応感及び学校回避感情の実態、教諭等の不登校の未然防止の取組に関する意識、学校における不登校の未然防止に関する取組状況の傾向や特徴を明らかにし、「学校楽しいーと」を活用した重点的・組織的・継続的な取組の在り方について研究を進めてきた。

本研究の成果が、開発的・予防的生徒指導の基礎資料となり、児童生徒の支援の発展に寄与できれば幸いである。

最後に、本研究を進めるに当たって、実態調査に御協力いただいた多くの学校、実践事例を提供していただいた研究協力員の先生方、また、研究全般について御助言をいただいた鹿児島大学教職大学院准教授の関山徹先生に改めて心から感謝申し上げたい。

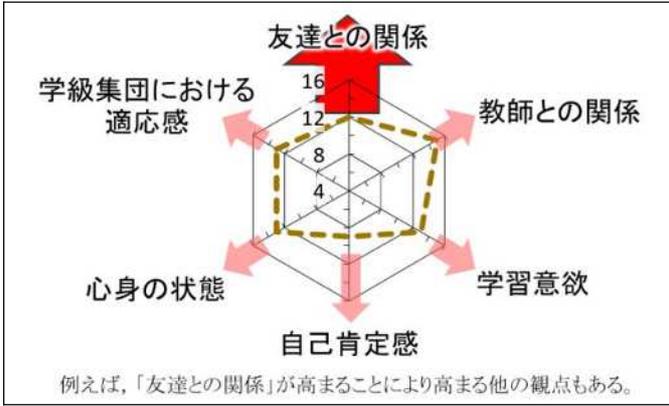
【引用・参考文献】

- 文部科学省 『生徒指導提要』 平成22年
『令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』 令和2年
- 国立教育政策研究所 『生徒指導リーフLeaf.14 不登校の予防』 平成26年
『第Ⅲ期「魅力ある学校づくり調査研究事業」(平成26～27年度) 平成29年
報告書』
『生徒指導リーフLeaf.22 不登校の数を「継続数」と「新規数」平成30年
とで考える』
- 嶋田未菜美・島義弘・大坪治彦 著 『日本教育心理学会第59回総会発表論文集「長期休業前後の児童の登校回避感情に学校適応感が与える影響」』 平成29年
- 鹿児島県総合教育センター 『研究紀要第119号「不登校の未然防止と支援の在り方に関する研究」』 平成27年

【参考資料 1】

不登校未然防止のための重点的・組織的・継続的な取組

重点的な取組 六つの観点の中から、重点的な観点を決めて取り組むこと。



これは、「学校楽しいーと」の六つの観点のレーダーチャートです。六つの観点は、一つの観点がが高まると、他の観点の中で高まる観点もあることが見られています。例えば、「友達の関係」を重点的に取り組むと他の観点も高まる関係性にあります。



組織的な取組 複数で組織的に校内支援チームで取り組むこと。



校内のチームで情報を共有して支援していくことが、不登校の未然防止につながります。

また、全ての教育活動について「不登校の未然防止につながる。」と意識して取り組み、「チーム」による共通理解と共通実践を深めましょう。



継続的な取組 R-PDCAサイクルに基づいて取り組むこと。



「Research（調査）→ Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（点検）→ Act（改善）」の検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）を基準にして改善を図りながら進めていくことで取組の有効性を高めることになります。



○ 不登校の未然防止のために、開発的・予防的視点からの取組を、全ての児童生徒を対象として、積極的に進めていきましょう。

【参考資料 2】

「学校楽しいーと」の各観点を高めるためのポイントと対応策

友達との関係

【ポイント】

- ◇ 友達の大切さやよさについて理解したり、実感したりできるように働き掛ける。



【対応策の例】

- 朝・帰りの会やSHR、学活やLHR等で触れ合い活動（SGE*¹⁾、SST*²⁾、誕生会、全校遊びなど）を実施する。
- 授業でペア、グループ活動を多く取り入れる。
- 道徳の時間や学校行事等を通して、友情について考えを深める。

教師との関係

【ポイント】

- ◇ 児童生徒一人一人に積極的に関わり、共感的な理解に心掛け、信頼関係をつくる。



【対応策の例】

- 登校・下校の際に、気持ちのよい挨拶やハイタッチ、握手等をする。
- 教育相談で児童生徒の気持ちに寄り添い、よいところを認め、支援・指導につなぐ。
- 児童生徒と一緒に掃除や給食準備をしたり、遊んだりする。

学習意欲

【ポイント】

- ◇ 児童生徒の実態を十分把握し、成長を評価するとともに、達成感を実感することができるようにする。



【対応策の例】

- 適宜、個に応じた承認、称賛、激励等をする。
- 個で十分に思考する時間、ペアやグループで意見交換や体験活動する時間を設ける。
- 分かる授業の工夫（学習ルール、TT、ユニバーサルデザイン、少人数指導、小中・小小・中高連携等）をする。

自己肯定感

【ポイント】

- ◇ 児童生徒のよさや頑張りを認め、自分への肯定的な気づきを促す。



【対応策の例】

- 学活やLHR等で、自他受容や自他理解を目的としたSGE*¹⁾（「ほめほめシャワー」、「いいとこさがし」など）を実施する。
- 授業の終末時にシェアリング*³⁾を行い、相互評価をする。
- 係活動、生徒会活動等で役割を設定（一人一役）する。

心身の状態

【ポイント】

- ◇ 児童生徒の状態を把握し、心身が不調になる状態及びその際の対処法について教示する。



【対応策の例】

- 「学校楽しいーと」の結果や個別面談等を通して、学校ストレス*⁴⁾を把握する。
- ストレスの理解と対処法を知る授業（ストレスマネジメント教育*⁵⁾）を行う。
- 簡単にできるリラクゼーション*⁶⁾の機会を設ける。

学級集団における適応感

【ポイント】

- ◇ 仲間への関心、相互の受容感や信頼感を高め、学級集団への愛着をもたせる。



【対応策の例】

- 係・委員会活動や当番活動等、認め合う場を設ける。
- 学活やLHR、宿泊学習や修学旅行等で、SGE*¹⁾等の心の触れ合う活動をする。
- 児童会活動や生徒会活動、学校行事等、児童生徒に企画・運営を任せ、成功体験を味わわせる。

*1) 構成的グループエンカウンター

*2) ソーシャルスキルトレーニング

*3) 振り返り

*4) 権威的あるいは驚異的と感じる刺激や出来事のこと、ストレス反応の原因となるもの

*5) ストレスをコントロールすることで、心身の健康を保ち、よりよい生活を送るためのスキルを獲得する教育

*6) 心身の緊張をほぐす技法